

国際社会における自己実現 ～世界を知り、自分をみつめる～

向井 香保利

神奈川県立住吉高等学校
神奈川県教育委員会派遣体験研修員

◆担当教科：国語 ◆実践教科：時事問題研究 ◆時間数：5時間
◆対象学年：高校2年生 ◆対象人数：14名

カリキュラム

<実践の目的>

異なる文化や考え方・世界が抱える課題等に目を向け、理解を深めることによって、主体的に思考する力を身につけさせたい。また、地球に生きる一員として、自己の役割を考え、自らの将来を設計する力を育んでいくことを目的としたい。

授業の構成

時 限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1	テーマ： 「JICA 事業について」 ねらい： 世界の現状について知り、国際協力機構の役割について認識を深める。	(1) 3分間で自分が知っている世界の国名をできるだけ、書きだし、競わせる。自分が書いた国が先進国が多いか、途上国が多いかを気づかせる。 (2) パワーポイントを使って、途上国が抱えている問題や ODA の実施機関の一つとして、日本が行っている、JICA 事業についての説明を行う。	(a) 地図 (b) ワークシート
2	テーマ： ①「ウガンダの人々の生活に迫る」 ②「写真が語る」 ねらい： ①ウガンダの概要を把握する。 ②ウガンダの教育・学校事情について考える。	(1) パワーポイントを使い、クイズを交えながら、ウガンダの衣食住、生活の様子、自然環境等の紹介をする。 (2) 「フォト・ランゲージ」写真から読み取れる、ウガンダの子供たちの生活について考え、イメージを膨らませる。日本と違う点・同じ点を考察する。	(a) パワーポイント教材 (b) ワークシート
3	テーマ： 「ビデオが語る」 ねらい： ウガンダの学校現場を動画で見ることによって、ウガンダの子どもの能力、パワー、	ウガンダ視察で撮影してきたビデオ画像を生徒に鑑賞させ、感想を話し合わせる。	(a) ビデオ

	優しさに触れる。		
4	テーマ： 「青年海外協力隊の仕事」 ねらい： 国際協力に携わる人々から学ぶ。働くことの意味を考える。	(1) パワーポイントを使い、ウガンダで働く、青年海外協力隊 10 人の紹介をする。10 人の中で、最も印象に残った人の言葉を書き取らせ、言葉の奥にある意味を考えさせる。 (2) 「国際協力プロジェクト」を考える。もし、自分が協力隊の一員として、任国に派遣されるとしたら、具体的にどんなことをしたいか、考えさせる。	(a) パワーポイント教材 (b) ワークシート
5	テーマ：まとめ 「発表・プレゼンテーション」 ねらい： 国際協力を身近な問題として捉え、今、自分ができることは何か、思いをめぐらす。また、自分自身の生活をみつめ直し、自己の生き方について考えさせる。	前時の内容について、グループ内でディスカッションし、発表する。	(a) ワークシート

授業の詳細

1時限目

パワーポイントを使って、世界の現状や途上国が抱えている問題、ODA の実施機関の一つとして、日本が行っている、JICA 事業についての説明等を行った。

【資料:使用したワークシート】

- ① 世界には、開発途上国といわれて困っている国が何カ国あるでしょう？
- ② 開発途上国はどんなことで困っているでしょう？
- ③ 私たちの食べている野菜・果物・魚などはほとんど外国から輸入している。○?×?
- ④ JICAの活動にないものはどれでしょう？
- ⑤ JICA横浜は、横浜にある動物園(ズーラシア)と協力して、絶滅が心配されている鳥の保護をしています。その鳥の名前は何でしょう？

クイズ形式で質問しながら、主体的に考えさせ、できるだけ発言させる!

生徒の感想

- 世界には、193ヶ国あって、そのうち、発展途上国が160ヶ国もあることを始めて知りました。途上国では、安心して飲める水がない、病気で亡くなる人が多い、栄養のある食べ物をとることができない、子供が学校に行けない、などの問題があり、自分の生活では水が当たり前で飲め、病気になったら病院へ行き、学校に行けるということは幸せなことなのだなあ、と思いました。
- 世界の現状は私の想定範囲を超えていて、恐ろしかった。65億人のうち、12億人が一日1ドル以下の生活をしている。昼休みに自販機で使う額のお金で一日の生活をしている。今の私たちには考えられないことばかりでした。
- 豊かな国と、貧しい国の差が激すぎてびっくりしました。5才まで生きられない子供が1000万人っていうの、めっちゃめちゃびっくりしたのと、同時に、悲しくなりました。
- 世界の困っている人たちの話をきいて、「死にたい」なんて軽々しくいっちゃいけないと思ったし、人生を無駄にしちゃだめだ、精一杯生きなきゃいけない、と思った。自分たちは、恵まれていてすごい幸せだなあ、と思った。物ありすぎだし、危険がすぐそこに迫っているわけじゃないから、実感が全然ないんだよなあ。だめじゃん、そんなんじやって思った。
- 私は今まで、国際援助とは、開発途上国にただ物や食べ物を送るだけだと思っていたのですが、JICAの「人を通じた国際協力」の役割を知って、実際に人が途上国に行って、子供たちと遊んだり、教えたりする援助があることに気づかされました。

2時限目

パワーポイントのスライドを見せながら、ウガンダの「衣食住」、「生活の様子」、「自然環境」等の紹介をし、ウガンダの人々の生活を想像させる。また、「ウガンダの教育事情」についても、印刷した写真をグループごとに、各生徒に手にとってみれるように提示し、写真から読み取れる、ウガンダの子供たちの教育環境について考え、イメージを膨らませる。また、日本と違う点・同じ点について考察させた。

【資料:パワーポイントのスライドの一部】





【資料: フォトランゲージで使用した写真(一部)】



【資料: 使用したワークシート】

写真を見せながら、自由に想像させ、意見交換する。

「日本の学校風景と違うところは・・・」「子供たちはどんな表情をしている？」
 「私の名前はフローレンスです。性格は？今一番したいことは何？」
 「写真を見て感じたことをまとめてみよう！」

ウガンダの教育事情

・ 写真を見て考えよう！

① 写真1: 教室の風景が写っています。この国は・・・

② 写真2: 子供たちが机で勉強しています。彼らの表情は・・・

③ 写真3: 先生が黒板に向かって話しています。黒板には・・・

④ 写真4: 子供たちが手を挙げています。彼らは何を話していますか？

生徒の感想

- 自分達の学校風景とは全然違って、驚きました。子供達の集中力がすごくて、先生の話を聞き逃さないようにしていて、自分達とのこの差は何なんだろう、と思いました。
- ウガンダって初めて聞いた国だった。意外と緑が多いみたいで驚いた。感染症や内戦など、色々な問題も抱えていることがわかった。自分には何が出来るのかなって考えた。
- みんな苦しい思いをして生活している大変なのかなあ、と思ったら、みんなすごく元気にここにいて、笑顔が素敵だなあ、という感じを受けました。それに、授業をすごく真剣に聞いていて、ウガンダの子供たちを見習わなければいけないなあ、と思いました。
- 机はみんなで一つだし、全員がノートや教科書を持っているわけではないし、電気がなくて暗いし、ペンとかもないし、私は勉強はつい疎かにしちゃうから、本当にぜいたくなことをしているな、って思った。学校に行きたくても、行けない子も世界にはいるのだから、様々なことを、もっと頑張ろうと思いました。
- みんな、元気で笑顔だった。なんで、日本とかはみんな学校に通えて、おいしい水、ごはんもとれて、帰る家もあって、戦争もないのに、ウガンダの人達の方が、笑顔が光っているんだらうって思った。

3時限目

ウガンダ視察で撮影してきた画像を、特に学校現場に限定して、編集したものを生徒に鑑賞させた。今回、5つの学校を訪問させていただいたが、行くところ行くところ、大変な歓迎ぶり、歌や踊りを一生懸命披露してくれた。また、私たちのデモンストレーション授業にも、真剣な眼差しで、耳を傾け、温かい笑顔をむけてくれたことも印象に残っている。写真だけでなく、動画をみせることにより、生き生きとした彼らの表情を伝えたいと思った。

生徒の感想

- 家族が何人もいて大変なのに、とても、まっすぐで素直なのに驚きました。わたしなら絶対に辛くて逃げ出してしまうそうなのに、ちゃんと現実をみつめていて、私よりずっと大人だと思いました。
- 皆、笑顔を本当に絶やさない。私たちなんかよりも、ずっと重い悩みを抱えていたりすると思うし、自分の思い通りにならないことも多いはずなのに、泣いたりしないで笑っている。それがすごいと思うし、一日一日をしっかりと楽しんで生活しているのかなと思いました。
- ソーラン節！すごすぎて泣いた。皆楽しそうに、好きなように踊っている。好きなように踊っているのに、バラバラじゃないの。ひとつなの、なんか。そこに感動した。ソーラン節は知っていたけど、日本にこんな皆をひとつに出来るような踊りがあって、それを知っているのに、ああ、生かせてないし、すごい教えられたなあって。部活も有志も、クラスも、仲間も、住高も、世の中も、世界中、全部全部、あんなふうになんか生き方ができたらいいのに。羨ましくてしかたなかったし、実際やりたい！
- とにかく、ソーラン節に感動した。自分も一緒に踊りたいなって思った。私たちは、すぐに上手に踊らなきゃとか、もっとみんなに合わせなきゃ、とか、とても気にしちゃうけど、そんなことはどうでも良くて、彼らのように、本気で全員が踊るってことが、一番大事なんだなって思った。彼らのパワフルさは、私に楽しむことや、真剣になることを教えてくれたような気がする。
- 学ぶ意欲がある子供たちは、輝いていた。見習わなければならない姿だと思った。教育の根本的な部分を見た気がした。

4時限目

パワーポイントを見せながら、ウガンダで実際に働いている、青年海外協力隊ならびに、JICA専門家、10人の紹介をする。10人の中で、最も印象に残った人の言葉を書き取らせ、言葉の奥にある意味を考えさせた。

また、青年海外協力隊の体験談の話を直に聞かせていただき、感じたことをまとめてみる。さらに、二人一組のペアになって、自分たちがやりたい、「国際協力プロジェクト」を考えてみる。もし、自分たちが協力隊の一員として、任国に派遣されるとしたら、具体的にどんなことをしたいか、ディスカッションさせる。

5時限目

本時は、これまでの授業の「まとめ」となる。国際社会で現実に働いている人たちが、どのような思いをもって、何を悩み、何を生きがいに、国際協力に携わっているのか、を知ることによって、国際協力を身近な問題として捉えさせる。二人一組になって、いつの日か実際にやってみたい「国際協力プロジェクト」について考えさせ、一組ずつ発表させる。また、互いに発表を聞きながら、プレゼンの仕方や、プロジェクトの内容について、評価しあう。

近い将来、自分たちが大人になった時、このプロジェクトを実現させるためには、どんな心づもりや準備が必要か、しいては、自分自身の生活を見つめ直し、これまでと、今後の自己の生き方についても考えさせたい。

【資料:使用したワークシート】

国際協力プロジェクト
★自分ができる! やってみたい国際協力を考える

組 番

国際協力活動名	
活動の目的	
活動の場	
役割	
どのように活動するか	
活動の進め方	
活動の進捗を報告すること	
どのように活動するかを話し、進捗を報告すること	

【資料:生徒たちが考えたプロジェクト(抜粋)】

国際協力活動名	どこの国で?	どのような活動をするか?	どのような結果をもたらし、終了するか
①「エイズを知る」	アフリカ大陸の国	学校を訪問して授業形式で、エイズとは何か。感染の仕方や予防法について教える。	エイズの感染を防ぐにはどうすればいいのか知識をつけることができる。正しい知識を持つことによって、差別をなくすのにつなげられる。
②「感染症対策」	病院が少ない国	正しい知識を伝える。予防策を伝える。	感染者を減らす。
③「HCP (Help child Project)」	開発途上国	子供たちと遊んだり、勉強を教えたり、食料や水など、不足しているものを持っていったり、募金活動をして学校を建てる。	子供たちのことを、かわいそうな子として接するのではなく、一般の子と同じように接する。現地の子がありがとう、といってくれるまで、頑張る。
④「HML (Happy Mother Life)」	アフリカ大陸の国	妊娠している人の栄養を助けるために、栄養バランスのある献立を考える。	栄養不足の子供が産まれないようにする。母子ともに健康に生きる。

⑤「美術支援団体」	アフリカ大陸の国	デッサンの仕方を教えたり、絵の具を使って絵を描いたり、粘土で陶芸をする。	アフリカの人たちに、描く、創る、といった美術の楽しさを教え、創作意欲を刺激し、心を豊かにしていく。
⑥「ボクシングを教える会」	アフリカ大陸の国	みんなで、スパークリングやミッド打ちをやる。	ボクシングによって、子供たちを鍛えることにより、肉体的にも、精神的にも強くなって、健康に暮らせる。
⑦「音楽教育」	モルディブ	マーチングバンドの指導者が不足しているので、楽譜の読み方や基礎的な音楽理論を指導し、マーチングバンドとしての合奏を可能にする。	音楽を指導する先生を育て、マーチングバンドを結成させて、学校外の音楽イベントの企画や参加に協力する。音楽の楽しさを伝えられたら、終了する。

生徒の感想

- 坪井専門家の、「50年後や100年後に、ウガンダ全体にお米の栽培が広まって、子供たちが学校に行けて、ウガンダの生活が安定することを望む。」という言葉。今すぐによくならなくても、未来を見据えて、今頑張る姿勢が素晴らしいなって思った。
- 伊藤隊員の、「何もないから、いいんです。何もないところから、いろいろなアイデアが生まれるんです！」って心に響いた。今、自分は日本でとても便利な暮らしをしていて、何をすることもなんとなく簡単にできてしまうけど、何もないと大変なことがあるんだらうなって思いました。でも、そこから、何かをするためにはどうしたら良いか考えて、アイデアを出してやっていくって、すごいと思いました。便利な生活になれてしまっている自分たちは、「考えること」があまり出来ないんじゃないかと思って、いろいろと気づかされました。
- 私は自分のことで、精一杯なのに、青年海外協力隊の人達は、人のために知らない土地へ行って、人のために活躍している。すごく偉大なことだと感じた。そして、いろいろな役割があるのだな、と思った。
- 青年海外協力隊は、自分を見つめ直す機会になるのかな、と思う。さまざまな出会いがあって、活動を通しての発見がある。自分にとって、意義のある、大切なことを見つけられる場になるんじゃないか、と思いました。

成果と課題

今回の実践授業の中で、私が目指した目的は、2つあった。1つは、生徒一人ひとりが、国際協力というものを身近に感じ、自分ができることは何かを考えるきっかけ作りをすること。もう一つは、そこから、自分の生活を見つめ直し、世界の中に生きる一員として、どう生きるべきかを考える、自分自身の哲学を持てるようなキャリア教育につなげたいという思いがあった。

生徒の感想から読み取れる言葉の中には、「貧しい国が抱えるさまざまな問題」に衝撃を感じ、「自

分たちが、当たり前で生活している環境が、いかに豊かで恵まれているものか」ということに気づきを持ったということが伺われる。また、「ウガンダの子供たちの、授業に対する真摯な態度」を目の当たりにして、それと比較して「自分たちが、いかに、日頃いかげんに授業に参加し、勉強できることに對して感謝の念をもっていなかったか」という、反省の弁?が多くでてきたのは、思いがけない収穫であった。さらに、ウガンダで実際に、国際協力に携わっている人々の取材を通して得られた「言葉」のフレーズから、彼らが何に悩み、何を生きがいとして関わっているのかを、想像させたことによって、村人の中にとけ込み、村人と共に生活するには、「地道な努力と限りない情熱」が必要であることを感じとったようだ。授業のまとめは、自分たちがやってみたく「国際協力プロジェクト」を考えさせ、プレゼンをさせた。まだまだ調査も不十分であり、内容も未熟ではあったが、生徒たちなりに途上国の問題を認識し、自分が得意とする、「美術」や「音楽」、「ボクシング」等を教えるという行為を通して、とりあえず何か行動をおこしてみたい、役立ちたい、と考えることができたようだ。

開発教育の授業の醍醐味は、内容に「驚きと発見」があり、そこから、自分の意思をもって表現する力を育てることにあると思う。そのため、教材には、できるだけ写真や動画を多用し、視覚的、聴覚的に、感性に訴える授業になるよう、工夫をした。ある意味、他の講義スタイル中心の授業形態への挑戦であった。生徒たちは、珍しい授業スタイルに毎時間、興味をもって積極的に参加してくれた。5時間の授業を通して、先に掲げた目的に、ある程度近づけたという実感はあるが、しかし、十分ではない。やはり、限られた5時間という時間は、あまりにも少なかった。今後は開発教育を、総合的な学習において、3年間を通した計画の中に位置づけ、必要な時間をとりながら、段階的にすすめていきたい、と感じた。もっともっと、生徒たちに「調べ学習」の時間をたっぷりとらせたかったし、他の視点、観点から切り取った教材づくりも、材料はたくさんあるので、これから研究していきたい。また、内容に現実味を持たせるという意味では、「人と人との交流」を今後、授業の中にとりいれていきたい。例えば、ウガンダの子供たちと直接文通をさせたり、JICAや国際機関、NGO、NPO法人と連携をとり、実際に世界を舞台に活動している方々の講演をきかせていただくなど、生の声で触れ合う機会を出来る限り作っていきたくと考えている。やはり、授業の中で、最も感動を呼び起こすのは、生身の人間同士の心のふれあいだからである。

